

[原著論文]

漱石作品が漢文学から受けた影響

高 継芬

【要旨】

本稿が取り上げた夏目漱石は、日本明治時代の文豪である。漱石は幼少期から漢詩漢文を精読し、教養を深めていた。漢文学を修得した彼は、そこからどのような影響を受けたか、漢文学にどのような影響されたのか、彼の作品及び彼の思想両面から論じていくこととする。

漱石はイギリス留学経験を持ち、西洋文明にも影響されたが、日本文学、西洋文学よりも漢文学を終始愛し続けていた。漢文学だけではなく漢文学の背景にある思想、すなわち儒教の思想にひときわ感化されていた。

漢文学では、政治、倫理道徳観念がもっとも重視されている。漱石の作品を貫いている思想は、漢思想と適するものがある。漱石は日本の文明批判家でもあり、社会批判家でもあり、明治社会に対する批判が漱石の重要なテーマであるといえる。

中国の読者が漱石の作品に親近感が湧きやすい理由は、作品の中に親しみやすい中国の漢詩や漢文の表現が多く見て取れることだけではなく、作品の行間から読み取れる彼の思想すなわち漢文学にある儒教思想と同じ思想が流れているからであり、漢文学は漱石の精神的創作の礎ともいえる。

キーワード：漢文学、儒教思想、明治時代、

I. はじめに

1. 問題設定

夏目漱石（1867—1916）は、日本近代文学史において明治の文豪という地位を獲得した。彼の作品及び彼の存在は、日本の近代化に大きな影響を与えた。

漱石は幼少期頃から正統的な東洋教育を受けて、漢文学に精通していた。1892年（明治25年）7月に東京帝国大学（現東京大学）で英語を専攻し、英文学にも精通していて、さらにイギリスに留学した経験を持ち、西洋の近代文明の影響を受けたことから、漱石は東洋と西洋文明両方の影響を同様に受けた作家だといえる。

本稿では、漢文学が夏目漱石の文学創作においてどのような役割を果たしていたのか、どのような影響を与えていたのかについて、漱石の作品と漱石の文学思想の両面から論じることとする。

彼の文学は、他に例をみないほど東洋思想と西洋思想を融合している。東洋思想は、彼が幼少期から漢文、漢詩を熟読したことによる影響であり、西洋思想は東京帝国大学（現東京大学）で英語を専攻し

たことに加え、彼自身がイギリスに留学したことによるところが大きいと考えられる。

漢文学の真髄は、政治、倫理道徳観念をもっとも重視するところにある。庶民の苦楽、戦争の悪影響、国家の興亡、倫理道徳は、いつの時代においても重要な課題である。本稿では、漱石の作品から漢文学への恐れや漢文学の素養など漢文学に関連するものの分析を行ったうえで、漱石は西洋思想の影響よりも漢文学（儒教思想）から受けた影響が大きいことと、彼の作品及び思想の原点は漢文学であることについて検討したい。

2. 先行研究と考察視点

儒教思想については、黒住真は『近代日本社会と儒教』の中で次のように述べている。「近代儒教とりわけ日本のそれは何だったのか」というと、当時の人々にとって儒教は学問であり、治世、処世の道、つまり、知の方法論であり倫理学、政治学、文化論であった。」¹⁾

山下龍二は『儒教と日本』では、「儒教は中国古

代に自然に発生した宗教であり、中国文化の基本であり、本来生活に密着したものであった。日本のお天道さま信仰と共通している。イエスとか釈迦というような特定の個人を教祖としていないから、その目に見えない力ははるかに強く、今もなお日本文化の基調をなしている。」²⁾と述べている。

宇野精一は『儒教思想』の中で「孔子の意義、ないし儒教の祖といわれる所以はどこにあるかという、いわゆる先王の道を集大成し、倫理と政治との一致を主張し、仁をその根本思想として取り上げた点にあるといえよう。」³⁾と述べている。

以上先行研究では、儒教思想について中国の文化の基本であることと儒教思想の祖は孔子であり、根本は倫理と政治であることを述べている。

古井由吉の『漱石の漢詩を読む』⁴⁾という作品や飯田利行の『海棠花』⁵⁾という作品では漱石の漢詩を詳しく解釈している。

先行研究の中で古川久（掲載当時は東京女子大）の論文「漱石と漢文学」があり、古川氏はこの論文で『木屑録』から『草枕』、そして『門』から『行人』の漱石の作品を分析した結果、漱石は漢詩を通して漢文学との結びつきがあったことを明らかにした。

また、海老田輝己の論文「夏目漱石と儒教思想」

（九州女子大学第36巻第3号）では「漱石は中国文学、思想の中でも儒教思想、それも古典の世界の影響が大きかった。しかし近代の中国や中国人には侮蔑的であったと思われる。」⁶⁾と記述してあるようにその視点は漱石の中国や中国人に対する態度を検証するものである。

本稿は古川氏及び海老田氏の論点を肯定し、その他の先行研究結果を汲み取りながら、漱石の作品を漢文学から受けた影響を分析し、漱石が幼少期からこよなく漢文学を愛し、漢文教育を受け、漢詩や漢文を熟読し、漢文学の教養が極めて高いことと、作品の内容から伺えた漢文学の影響について、また作品に含まれている儒教の思想倫理と政治面からの影響を分析し、最終的に、漢文学は漱石の創作の礎ということについて検討する。

II. 日本と漢文学

1. 東アジアでの漢文学

歴史の視点から文化面を見れば、東アジアにおい

ては、通用文字は漢字、公用文は漢文、倫理道徳は儒教、哲学は朱子学というような漢字文化圏が形成され、漢詩文は教養の必須条件として中国を始めとする漢字文化圏内諸国の知識人たちの学習対象であった。その結果、漢詩文における価値観と美意識が周辺の国々の知識人に多大な影響を及ぼした。日本にも最も早く紹介され、輸入された中国の詩文集は『文選』⁷⁾であると言われている。

日本で江戸時代以来基本的な詩集として好まれていたのは『唐詩選』であった。また漢文教養が知識人としての必須条件であるという認識は、江戸時代から明治十年代の半ばまで根強く存在していた。

2. 明治時代の特徴

漱石が生まれた明治時代は、日本の開国による西洋文化の到来、日清戦争と日露戦争、そして明治天皇の崩御があった。

教育面では、1872年（明治5年）に日本に近代学校制度が導入されたが、明治時代に、日本における道徳教育の歴史を見ると、道徳教育を巡る相克があり、近代学校における道徳教育の在り方については、1890年（明治23年）に教育勅語が出されるまで動揺し続ける⁸⁾。

経緯として、明治初期の教育内容（特に高等教育）については、英米の教科書の直訳を使用したため、「学問は身を立てるの財本(もとで)」とする英米流の功利主義に靡き日本伝統の美風を軽んじる悪弊が生じ、心ある人々の間に道徳教育の在り方について改善を求める動きが沸き起こった。

換言すれば、儒教思想の道徳教育を主張する派と開明派道徳教育観と保守派の道徳教育観の対立になる。

教育勅語は儒教思想主義の道徳教育である。

戦前戦後を通し、新旧東西の思想は道徳教育のありかたを巡って対立し、時には大きな政治的問題となった。人々の意識や一国の文化的伝統は、道徳教育に集約され反映されるものである⁹⁾。

教育勅語の成立を通して日本の伝統的な儒教思想と西洋文明が対立する中、漱石は西洋文明を日本に導入することを強く批判したが、これは彼が幼少期から受けた漢文学の背景にある儒教思想の影響ではないかと考えられる。

3. 漱石が受けた漢文学教育

明治時代に入ってから、小学校、中学校、高等学校、大学などの近代学校が続々と建てられたが、儒者による漢字塾の教育は依然として歓迎されていた。

明治二年に島田篁村が叟桂精舎を開き、明治三年には岡鹿門が綏猷堂を作り、明治十年に三島中洲が二松学舎を建て、さらに明治十一年に小永井小舟と山井清溪がそれぞれ濠西精舎と清溪学舎を開いた。漱石も例外ではなく、二松学舎に一年間通い、期間中「唐詩選」、「皇朝史略」、「古文真宝」、「復文」、「孟子」、「史記」、「文章軌範」、「三体詩」、「論語」を学んだ。

漱石は、幼少期から漢文学に特別な興味を持っていた(詳細は後に述べる)。唐朝及び宋朝の詩歌と史書を通読していた。7歳で小学校に入学した当時の小学校の授業科目は、算数、物理もあったが、中心的な科目は漢文学だった。漱石は他の知識人の子ども達と同じように、早くから漢文の書物を通読した。1878年2月、12歳の時、漱石は史論の体裁を模倣して短編『正成論』を執筆した。この短編片は、主人公の武将楠正成が祖国のために尽くす物語を通して、儒家の忠義報国思想を称賛したのである。1881年(明治14年)春東京第一中学校を退学し、当時漢学者の三島中洲が創立した有名な漢学塾二松学舎(現二松学舎大学)に入学した。ここで一年間勉強した。当時の成績表が残っているが、かなり上位の好成績である¹⁰⁾。漱石は、明治14年7月に第3級第1課を、同年11月に第2級第3課を卒業した¹¹⁾。授業内容は次のようなものであった。

第3級第1課

唐詩選、皇朝史略、古文真宝、復文。

第2級第3課

孟子、史記、文章軌範、三体詩、論語。

多くの者は3級程度で、2級以上の学力を有する者はまれだったという。

期間中、《日本外史》《十八史略》《小学》《唐詩選》《史記》《論語》などを学んだ。そして漱石はそれ以外にも毎週漢文による作文を練習するなど、漢文学の素養を高めていった。

漱石が在籍していたのは、わずか1年ほどだったが、多感な少年時代に二松学舎で培った漢詩文の知識と教養は、文豪のその後の人生に大きな影響を与

えた。

Ⅲ. 漱石と漢文学

1. 漱石の漢文学への憧れ

漱石は『文学論』(1907年5月、大倉書店・服部書店)の序文で、次のように述べている。「余は少時好んで漢詩を学びたり。之を学ぶ時短じかきにも關らず、文学は暫くの如き者なりとの定義を漠然と冥々裏に左国史漢より得たり。ひそかに思ふに英文学も亦かくの如きものなるべし、欺くの如きものならば生涯を挙げて之を学ぶも、あながちに悔ゆることなかるべしと。・・・卒業せる余の脳裏には何となく英文学に欺かされたが如き不安の念あり、・・・翻つて思ふに余は漢籍に於て左程根底ある学力にあらず、然も余は十分之を味ひ得るものと自信す。余が英語における知識は無謀深しと云ふからざるも、漢籍に於けるそれに劣りとは思わず。学力は同程度として好悪のかく迄に岐かるは両者の性質のそれ程に異なるが為ならずんばならず、換言すれば漢学に所謂漢文学と英語に所謂文学とは到底同定義の下に一括し得べからざる異種類のものたちざる可からず。」¹²⁾

漱石は、漢学を勉強する時期は短かったと述べているが、これは恐らく二松学舎時代を意識しての言葉だと思われる。しかし、12歳の時に漢文「正成論」を書き、友人の父の漢学塾に習い、16歳の時に湯島聖堂の東京図書館へ行って萩生徂徠の『護園十筆』を熱心に写す。漱石の漢学の素養は、彼の英文学の素養と同等に語るべきものではない。

漱石が幼少期から漢文に対して興味を示していることが分かる作品がある。彼が1889年(明治22年)に書いた『木屑録』の開始部分にも、「余児時誦唐宋数千言喜作為文章。」と書いている¹³⁾。また、漱石は『処女作追懐談』¹⁴⁾の中でも次のように述べている。「茲で一寸話が戻りをするが、私も十五六歳の頃は、漢書や小説などを読んで文学というもの面白く感じ、自分もやってみようという気がしたので、それを亡くなった兄に話して見ると、兄は文学は職業にゃならない、アコンプリッシメントに過ぎないものだ云って、寧ろ私を叱った」¹⁵⁾。漱石が大量の漢書を熟読することで中国文学に興味を湧いたことが伺える。『余が文章に裨益せ

し書籍』の中でも次のように述べている。「漢文では享保時代の祖徠《そらい》一派の文章が好きである。簡潔で句が締まっている。安井息軒の文ははやしかりば今もときどき読むが、軽薄でなく、浅薄でなくてよい。また、林鶴梁の『鶴梁全集』もおもしろく読んだ。」、「いったいに自分は和文のような、柔らかいならだらしものはきらいで、漢文のような強い力のある、すなわち雄勁《ゆうけい》なものが好きだ」¹⁶⁾。ここでは、漱石が和文よりも漢文が好きだということを示している。

2. 正岡子規との出会い

漱石が漢文や漢詩に対して大きな愛着心を抱いたのは、正岡子規を抜きにしては語れない。

漱石も子規も幼いころから漢詩文に親しんでいた。漢詩文は彼らの文芸の出発点と基礎、即ち原点というべきものである。

1889年（明治22年）、大学予備門で漱石は俳人・正岡子規と初めて出会う。この出会いは漱石へ人間的影響を与えただけではなく、文学的にも多大な影響を与えるものだった。俳人としての正岡子規の知識は素晴らしく、しばしば漱石は子規より俳句をおそわっていた。この交流を通して、二人は生涯の親友となる関係を築いていたのである。

二人とも漢文学から深い影響を受け、漢文学の素養を持ち、生来詩人の素質に恵まれている。漱石の漢詩を作る意欲は、子規からの刺激を受け初めてできたと言われている。若い頃二人は、漢詩の応酬による交遊した親友同士でもある。

子規とは俗に「馬が合った」のであろう。隠し立てなく秘めごとを詩に託して子規に聞いてもらっていた。子規は、漱石のうちに蔵されている文学の萌芽を引き出してくれた大恩人である。・・・かくして子規は、漱石に「畏友」と冠して畏敬した。漱石はまた、子規の俳句はいうまでもなく人間の魅力にひかれていた¹⁷⁾。

二人の漢詩に関しての付き合いは長いが、中でも正岡子規といえば「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」という俳句で有名だが、この句、親友である漱石の「鐘つけば銀杏ちるなり建長寺」の俳句を受けて作ったもので、子規と漱石の真の友情を物語るものとして生まれたということである。

また前文にも触れた『木屑録』についても、漱石は1889年（明治22年）、23歳で房総を旅した際に日本寺を訪れており、この房総旅行を級友正岡子規に宛ててつづった漢文紀行『木屑録』を完成させた。その約2年後、正岡子規は25歳で房総を旅し、日本寺を訪れていた。この時の旅について綴ったのが「かくれみの」である。

漱石の雅号「漱石」の由来として中国の典故『晋書・孫楚伝』¹⁸⁾にあるという有名な話がある。この雅号は正岡子規から譲り受けたとも言われている。

この雅号の由来の話から、漱石が正岡子規との友情の深さを証明しただけでなく、漢文学に対しての執着を感じさせるところでもある。

子規が手がけた漢詩や俳句などの文集『七草集』が学友らの間で回覧されたとき、漱石がその批評を巻末に漢文で書いたことから、本格的な友情が始まる。この時に初めて漱石という号を使っている。

IV. 漢文学及び漢文学の背景にある儒教思想が漱石作品に与える影響

1. 漢文学が漱石の作品に与える影響

漱石と漢文学の関係を論じるには、彼が作った漢詩に言及しない限り始まらない。漱石は、青少年時代から漢詩を作り始めていた。その後、中断した時期もあったが、一生を通して書き続けたと言えるほど漢詩の作品の数が多い。彼の漢詩は通算208首あり、日本の漢詩詩人と称されるほど漢詩の多作作家である。中国の研究者、常静によれば、夏目漱石の漢詩を以下のように四つの時代に分けることができる。

(1) 学生時代（1889年－1894年）（明治22年－明治27年）51首ある。

現存の漱石の作品の中で初めての漢詩は、彼の17歳の時の作品、七言絶句である。

鴻台冒曉訪禪扉 鴻台曉を冒して 禪扉を訪えば
孤磬沈沈斷続微 孤磬沈沈 断続して微かなり
一敲一推人不答 一叩一推人答えず
驚鴉燎乱掠門飛 驚鴉燎乱 門を掠めて飛ぶ¹⁹⁾

この漢詩は中国の唐代の詩人、賈島の有名な“推敲”という典故を借用した²⁰⁾。

夜明けが近づく古寺、人気なくひっそりとした空間、途切れながら微かに聞こえる響の音、門を掠めて飛び立つ驚いた鴉、この光景から一種の禅的な寂寥を感じさせる。仏暁の暗闇の中に外界を感受するのは聴覚によるものが多いため、静かな夜明け前の響の音は人々に深い印象を与えるものである。それは夜の侘しさと古寺の静けさを際立たせるばかりではなく、夜の深遠と禅の神秘を物語っている。しかも、この「鴻台」の詩には言葉の使用から詩の題材、境地に至るまで、漢文学の濃厚な投影が見られる。

それは、漱石の漢文学に対する高い素養によるものだとしか考えられない。中国の往古の詩人達は、寺の「鐘響音」に対して特別な愛着を持っている。日本人によく知られている張継の詩「楓橋夜泊」には、「姑蘇城外寒山寺、夜半鐘声到客船」という句がある。漱石の詩は、この詩と共通する雰囲気が漂っている。彼が1889年(明治22年)に書いた『木屑録』の開始部分にも「余兒時誦唐宋数千言喜作為文章。」と書いているように、漱石が中国の詩を読んでいたとは考えられない。

また、唐の詩人賈島の有名な詩「李凝(りぎょう)の幽居(ゆうきょ)に題す」の「僧敲月下門(僧ハ推ス月下ノ門)を連想させる。賈島がこの句に「推」と「敲」のどちらを用いるのかで夢中になったという話は、中国詩壇の佳話として伝えられてきた。漱石も当然この詩を読んでいたであろう。²¹⁾と徐前が述べている。

17歳の若さにしては静けさ、寂しさ、探索という雰囲気を全面的に出している。漱石は17歳の若さにして漢詩の才能があふれていること、中国文学に素養が高いことがこの詩から明確に伺える。

(2) 松山、熊本時代(1896年-1900年) (明治29年-明治33年) 23首の漢詩がある。

1895年夏目漱石は松山中学校に赴任し、1年後に熊本第五高等学校(現熊本大学)移動。熊本時代では、漱石は俳句作りに熱中していた。

(3) 修善寺大患後時代(1910年-1916年) 59首の漢詩がある。

修善寺の大患というのは、漱石が明治43年8月に伊豆の修善寺温泉で大吐血し、一時、生死の境をさまよった出来事である。漱石はその数日前まで、胃潰瘍の治療のために長与胃腸病院に入院していた。そして小康を得たのを幸いとして、医者への許可を取り付けたうえで、保養のために修善寺温泉へ向かったがそこで病状が悪化して、寝込んでしまった。一時は、危篤状態にまで陥った。

修善寺大患後、夏目漱石の作品は五言体が増える傾向にあり、またこの期間の漢詩の特徴は、唐詩の風格に近い自然を静観する作品が多く残されたことである。

(4) 臨終前作った漢詩が75首である。

1916年8月-同年11月20日の3か月間の間に、毎日のように午前小説『明暗』を執筆し、午後は漢詩を作るといふ生活を送っていた。

この時期に漱石は重い病気にかかっているにもかかわらず、ひたすら小説を書き続けていた。主に、「則天去私」といふ観念を反映する作品を書いている。

『明暗』は円満とはいえない夫婦関係を軸に、人間の利己(エゴイズム)を追った近代小説であり、漱石の小説中最長の作品である。則天去私の境地を描こうとした作品とも解されている。

「則天去私」とは心の内部を掘り下げながら近代的自我をぎりぎりまで追求した漱石が最後にたどり着いた境地であり、許すことを理想とする立場であった。それは晩年に彼の揮毫に見られる「則天去私」の思想に通ずる。個人の自我を超えた大きな存在(天)に、自分を委ねる生き方である。天に委ねることで人に寛容であり、何ものをも包摂できるのであり、漱石が晩年にたどり着いた境地である。

「不自然は自然には勝てないのである。技巧は天に負けるのである。策略として最も効力あるものが到底実行できないものだとすると、つまり策略は役に立たないといふ事になる。自然に任せて置くがいいといふ方針が最上だといふ事に帰着する。」²²⁾

修善寺大患後時代は自然を静観する作品を残したことから、晩年の漱石は禅に近い世界を求めたことが伺える。

2. 漢文学の背景にある儒教思想が漱石作に与える影響

漢文学思想の根源は孔子、孟子を代表とする儒家思想である。孔子は中国儒学の創始者である。二千年来、中国では儒家思想の影響は政治、文化等の面だけでなく、中国人の行動と思考方式にも及んでいる。儒学は中国の二千年にわたる封建社会の中で、正統的な思想として位置付けられ、長期的に独占的な地位を確保していた。

漢文学の真髄は、政治、倫理道徳観念をもっとも重視している。庶民の苦楽、戦争の勝敗によりもたらされる悪影響、国家の興亡、政治と倫理道徳はいつの時代においても主な課題である。漱石の作品が貫いている思想は漢文学思想と同じものである。漱石は日本の文明批判家でもあり、社会批判家でもある。明治社会の西洋文明への盲目的な崇拜を批判することが夏目漱石の重要なテーマであったといえる。

儒家思想を具体的に言うと修身、齐家、治国、平天下、（《礼記・大学》）を中心とした思想。仁、義、礼、智、信を基準にした道徳観念。天、地、君、親、師の順番にした倫理観念。この思想の支配の元で漢文学は、国民を教育するという目的も含まれている。

中国において漱石は現実の世界の批判家という評価をされている。理由は、彼の作品は常に社会の悪い一面を容赦なく批判しているからである。

また漱石が明治時代の近代文明を批判できたのも幼少期から漢文学に深く興味を持ち、そして漢学を勉強することによって文学素養を高めたからともいえる。

儒教思想も漢詩も漢文学に含まれている関係にあることから、次は漢文学の背景にある儒教思想の影響を受けた漱石の作品を分析していく。

1) 近代文明批判

近代文明についての批判は、たとえば、（『吾輩は猫である』という作品の中で「猫」の口を借りて）、明治時代に国が総力を挙げ、西洋文明を日本に取り入れようとしている中で、漱石が日本人の西洋化に対する盲目的な崇拜を批判していたことを、次のように述べている。

「運動をしるの、牛乳を飲め、冷水を浴びるの、

海の中へ飛び込め、夏になったら山の中へ籠って当分霞を食へのとくだらぬ注文を連発する様になったのは、西洋から神国へ伝染した軌近の病気で、矢張りペスト、肺病、神経衰弱の一族と心得ていいくらいだ」²³⁾。ここで明治時代に西洋文明を国が総力を挙げて取り組もうという姿勢に疑問を感じ、漱石は日本人が自己を持たず、盲目崇拜している西洋文明は伝染病と同じだと主張している。

漱石は『坊ちゃん』という作品の中で、無鉄砲で江戸っ子であり、社会制度よりも義理を重視する「坊っちゃん」（名前は登場しない）が、松山の中学校で教師として働きに行く。そこで色々な教師や生意気な生徒達との出会いを通して、最終的には、悪を懲らしめようとした主人公（ぼっちゃん）の同僚山嵐が社会的には負けていることを通して、教師や教育、官僚制度への批判、あるいは文学士の自分に対する批判、そういったものを含む近代文明を批判した。

2) 戦争に対しての批判

『三四郎』²⁴⁾という作品の開始の部分で、漱石は小説に登場した人物、「爺さん」の口を借りて戦争の罪悪に対して強く批判した。「自分の子も戦争中兵隊にとられて、とうとう彼地で死んでしまった。一體戦争は何の為にするものか解らない。後で景気でも好くなればだが、大事な子は殺される、物価は高くなる。こんな馬鹿氣たものはない。世の好い時分に出嫁ぎなど言うものがなかった。みんな戦争のお陰だ。」²⁵⁾ここで戦争がもたらす悪い影響、そして戦争はあつてはいならないという漢文学の思想が貫かれている。

3) 倫理道徳

倫理及び道徳についての探究は、漱石の作品においても重要な課題の一つである。漱石が1916年（大正5年）に書いた最終日記の中でこのように述べている。「倫理的にして始めて芸術的なり。真に芸術的なるものは必ず倫理的なり」²⁶⁾。この思想は作品の中で次のように表現されている。

『虞美人草』という作品は、新潮文庫の背表紙に書いてあるように豊かな詩才に恵まれ、傲慢で虚栄心の強い美しい女性藤尾は、その濃艶な魅力で温厚

な秀才小野の心を惹きつける。小野はやがて藤尾の遊戯的な愛に気付き、古風でもの哀れな恩師の娘小夜子と結婚する。小野の裏切りにより、ついにすべてを失った藤尾の破局に向かう凄惨な姿を通して、道義の中に人間の真の生を追求し、現代人の心を激しくゆさぶる問題作である。

『それから』という作品は、30歳の主人公永井代助は義理堅い気持ちで、本当は好きである三千代を友人の平岡常次郎に譲ったが、後に三千代をくれないかと頼むことで平岡常次郎から縁を切られる。代助は個人の愛情と社会倫理の間で苦渋の選択について描写している。

『門』という作品はある意味では、『それから』の続編になる。『それから』の中で父や兄弟を裏切った代助と三千代はそれぞれ『門』の中の宗助と阿米に変身する。親友の安井を裏切り、その妻であった阿米と結ばれた宗助は親友から女を略奪したという罪悪感から悩まされ続けている。その背徳した罪悪感故、社会と断絶した二人だけの世界にこもり続けた。夏目漱石の後期三部作、『彼岸過迄』『行人』『ころ』を通して更に人間の内面世界を分析し利己主義を徹底的に批判した。特に男女の愛情の葛藤から生まれた私利私欲、そしてその私利私欲による罪悪感、苦悶、孤独と絶望を描写している。『ころ』の主人公は若い時、未亡人の御嬢さんに恋を抱くようになったが、ある時、Kからお嬢さんに対する恋心を打ち明けられた主人公は、Kの恋愛をあきらめさせるために「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」と言い放つ。他方、自分は未亡人を見方にして、お嬢さんとの結婚の約束をしてしまう。それを知ったKは自殺した。主人公は愛情の矛盾から利己的なことをしたことによって十字架を背負ったことになり、最終的に主人公も自殺してしまう。

漱石はこの教訓から、利己主義は自分にも他人にも害を及ぼすことを警告した。この小説は漱石が利己主義を批判した作品でもあった。

最後に執筆した小説『明暗』も、数多くの男女役を登場させ複雑な心理的な変化の表現を通して、人間の利己主義を徹底的に批判した。

3. 漱石が論語から受けた影響について

前述したように、漢文学思想の根源は孔子、孟子が代表する儒家思想である。『論語』は、孔子の弟子達が孔子の言葉を記述したものである（古代中国の大古典「四書」のひとつで、孔子とその弟子たちの言行を集録したもの。古い道徳主義のイメージをもつ人もあろうが、人間として守るべきまた行うべき、しごく当り前のことが簡潔な言葉で記されている）。

漱石がその『論語』から受けた影響もよくみられる。漱石が二松学舎で1年間勉強した時に、『論語』の科目があった。

漱石を一躍著名にした初期の作品『吾輩は猫である』²⁷⁾には、『論語』を次のように引いている。

・夫子の道は忠恕のみ

「公德と申すと何か新しく外国から輸入して来たように考える諸君もあるかも知れんが、さう思ふのは大なる誤りで、昔人も夫子の道一以て之を貫く、忠恕のみ矣と云われた事がある。この恕と申すのが取りも直さず公德の出所である」²⁸⁾。他人への思いやりこそが公德の出発点であり、その思いやりを欠いている生徒たちへの教訓を述べているところである。

この引用から漱石の作品、「私の個人主義」(1914年)の思想の原点を伺うことができる。恕は思いやり、漱石は「私の個人主義」の中で「自己の個性の発展を遂げようと思うならば、同時に他人の個性も尊重しなければならない。」と書いているように、他人の個性を尊重しなければならないとは、正しい思いやりそのものになる。これは『論語』の次の一節による。

・「参や、我が道は一以て之を貫く」曾子曰く「唯」子でづ。門人問いて曰く、「何の謂いぞや」曾子曰く、「夫子の道は、忠恕のみ」

(孔子先生がおっしゃられた)「門人の参よ、私の説いているという者は一つのもので貫かれているのだ」。曾子は「はい、わかりました」と答えた。孔子が退出された。すると門人たちが曾子に質問していった。「どのような意味でしょうか」と。曾子は

「先生の道は、真心と思いやりということだけなのだ」と答えた。という一節を縮めたものである。そして更に『論語』から「忠恕（私利私欲を捨てた、思いやりの真心）」の一節を引き、「さて、〈恕〉は、他人へのおもいやりであるが、これを孔子は、〈己の欲せざる所は、人に施すこと勿かれ〉とも言っている。自分のして欲しくないことを、人にしないということが人間として一生行う価値のある道徳である」と説いている。

・徳は孤ならず、必ず隣あり²⁹⁾

これは『論語』の「徳は孤ならず、必ず隣あり」を踏まえて詠まれている。孔子の体験からの言葉であろうと思われるが、徳のある者は、時には孤立する時があったとしても、長い目で見れば、必ずその徳を慕って人が集まってくるものだという意味である。そこからこの句は、庭の木にたわわにみのった蜜柑を歌いながら、その持ち主の人徳を見て取り、讃えているのである。

ここで漱石は論語を愛読したことを伺える。

4. 漱石の最高境地「則天去私」について

漱石の作品の中で、とくに初期の頃、漢文と漢詩がよく使われていた。

東洋の美意識の下で創作されたと知られている作品『草枕』は、王維と陶淵明の詩を引用した。作品の中で漱石は、どこに行っても世の中に住みやすい場所などないと悟った時に次の漢詩を引用した。

「うれしい事に東洋の詩歌はそこを解脱したのがある。採菊東籬下、悠然見南山。・・・」

只それぎりの裏に暑苦しい世の中を丸で忘れた光景が出てくる。・・・超然と出世的に利害損得の汗を流し去った心持ちになれる。

獨座幽篁裏、弹琴復長嘯。深林人不知、明月来相照。・・・

（独り竹やぶに静かに坐って、琴を弾きながら詩歌を詠う。奥深いこの林の中のわが庵があるなど誰も知らないが、明月だけはちゃんと訪ね来て照らしてくれる。この語は世俗を離れて林野に隠棲し自然を友とし、独り幽境に遊ぶ閑道人の悠然自適の境涯を伺うことができる。

汽船、汽車、権利、義務、道徳、禮儀で疲れた後、凡てを忘却してぐっすりと寐込む様な功德である。）

上の記述を見てわかるように、漱石が漢詩をこよなく愛していることが伺える。同時に漢詩は彼が晩年に提唱した「則天去私」の境地の出発点とも言える。

5. 漱石の作品の中での漢文学的な表現手法について

作品『吾輩は猫である』は、全編を通して漢文の言葉及び文章表現で一貫している。誇張と諷刺という表現手法もうまく駆使している。

たとえば、くしゃみ先生と金田夫人が初めて会った時、猫は夫人を観察して次の言葉を発する。「鼻子の方では天が下の隅にこんな変人がやはり日光に照らされて生活していようとは夢にも知らない。」³⁰⁾ この表現では漢文をそのまま使っていないが、全体的に見ると中国の文体表現に近い。

「天が下」は中国では「普天之下」と表現する。「日光に照らされて」中国語では「活在光天化日之下」と表現する。「夢にも知らない」は中国語訳では「做梦也没有想到」と表現する。この文体表現が、中国語そのものと連想させられる。

また中国で漱石を専門に研究する劉介入の考証によれば、漱石の随筆『人生』は分量としては2、3千字しかないが文章の中に中国の歴史典故を大量に引用している。ここでも漱石が漢文学をこよなく愛着していることと漢文学の教養の深さを伺える。

V. 考察と分析

以上、漢文学が漱石の作品及び文学思想に与えた影響を分析した。漢文学思想の根源は孔子、孟子を代表とする儒家思想であり、政治、倫理道徳観念がもっとも重視されている。漱石の作品の中には、その倫理道徳に関連するものが多いことがはっきり分かった。また、漱石の思想面においても、中国の『論語』から深く影響を受けていることもはっきり分かった。

彼はイギリスにも留学した経験があり、あまりなじめはしなかったものの、西洋文明にも少なからず影響された。にも関わらず、彼は死ぬまで漢詩を書き続けていたことや、明治時代の日本人が盲目的に

西洋文明を崇拜することを批判することは、漱石が幼少期から受けた漢文学らの背景にある儒教思想の影響と思われる。

漢文学は幼少期から好き好んで習ったことに対して、西洋文明は当時の明治政府（文部省）の命令により渡英し、いわば官の立場での留学であった。

英国は完全に都市化していた。英国人は自然と接触のある生活を失い、「近代」を獲得するために派遣された彼はまもなく「近代」が限りなく奪うことを知ってしまった。人間相互の信頼感を、安息を、日光を、田園と緑の樹木を。

漱石は倫敦に住み暮らした二年は尤も不愉快の二年なり。余は英国紳士の間にあって狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あはれなる生活を営みたり³¹⁾。

英国に留学した漱石は、英国人の東洋人に対する根強い偏見に触れて、東洋人としての自覚に目覚めた。英国人は何事も自己を標準として東洋人を侮蔑し、東洋の思想や文化を理解しようとせず、西洋人に同化させようとする。

英国人の生活と文化に違和感を覚える漱石は、自分の文学観を養った東洋と西洋では、文学に対する考えが根本から違っていることに気付いた。すべて西洋が標準であるならば、東洋の文学が否定され、ひたすら西洋人の真似をしなければならないことになる。

イギリスを好んでいなかったが、イギリスで西洋的自由と個人主義を学び、それを身につけて帰国した。漱石は言う、「西洋人がこれは良い詩だと言っても、自分が心からそう思わなければ、受け売りすべきではない。我々日本人は、イギリスの奴隷ではない。一個の独立した日本人である限り、自分のしっかりした見識を持つべきだ」と。彼は西洋人の近代的個人主義を身につけ、無批判な西洋化の風潮を拒絶する一方、帰国後は日本の封建主義の残滓という「世間」から脱皮を計ろうとした。

その後、心の内部を掘り下げながら、近代的自我をぎりぎりまで追求した漱石が最後にたどり着いた境地は、許すことを理想とする立場であった。それは晩年に彼の揮毫に見られる「則天去私」の思想に通ずる。個人の自我を超えた大きな存在（天）に、自分を委ねる生き方である。天に委ねることで人に寛容であり、何ものをも包摂できるのである³²⁾。

また、漱石研究に詳しい吉田精一が『日本近代文学の比較文学研究』で言うように「漱石の作品にも、時にメレディス、オースチンの匂いはしても、それらをすっかり消化しきって、部分的な技巧の以外には、目につくものがないほどである。」³³⁾

彼の思想には始終漢文学、所謂儒家思想が貫かれている。西洋文明よりも漢文学から受けた影響の方が大きいと言える。

庶民の苦楽、戦争の勝敗、国家の興亡、倫理道德はいつの時代においても主なテーマである。漱石の作品に貫かれている思想は、漢文学に含まれているものと極めて近い。

漱石の漢詩の創作力は凄まじいものがある。彼は、二松学舎（当時は漢文の専門学校）で、朝から晩まで漢文を集中的に学んだ。その漢文という根底があったからこそ、秀英学舎（現在の明治学院大学）や東京帝国大学（現東京大学）で英語を専門にしてからも、英語の学力的な伸びが著しかったのだといわれている。漢文には魔力があり他の科目に集中できないということで、東京帝国大学では漢文の書物をすべて捨てて英語の勉強に集中した漱石であったが、晩年はまた、小説の原稿の合間に漢詩・漢文を創作していた。漱石は日本人でありながら、英文学に関しても優れているが、漢文学から始まり、漢文学で終わった人生という表現の仕方が正しいといえよう。

VI. 結びに代えて

漱石は『吾輩は猫である』から『明暗』まで一刻も休む暇がなく、常に社会的な暗い面、人間の暗い面、そしてむやみに西洋文明を崇拜するという明治時代の近代文明を批判し続けていながらも、彼は社会現実から目を逸らすことがなかった。彼は、現実主義的な創作手法を用いて、また典型的な社会現象に着目して作品を完成させているが、その作品には人々の生活、特に知識人の生活を反映させていた。

彼の作品は社会現実と密接に連携しており、読者の自分に周りのことや現実にかけていることに対して反省させる作品でもある。

彼の作品に示されている倫理道德の基本は、漢文学に含まれている倫理道德が反映されている。

中国の読者が漱石の作品を読むと、親近感が湧くという。作品の中に親しみやすい中国の漢詩や漢文

の表現が多く見てとれるだけでなく、作品の行間から読み取れる彼の思想、すなわち漢文学にある思想と極めて近い思想が流れているからである。ここで漢文学は漱石の創作の礎という結論に至ったが、今後、更に漱石と漢文学の関わりを追究するため、漱石が中国においてどのとうに理解されたのかについて研究を続けていくことが必要である。

【注釈・参考文献】

- 1) 黒住真『近代日本社会と儒学』 株式会社ペリカン社 2003年
- 2) 山下龍二『儒教と日本』P80 研文社 平成13年
- 3) 宇野精一『儒教思想』講談社学術文庫1984年
- 4) 古井由吉『漱石の漢詩を読む』 岩波書店2008年
- 5) 飯田利行『海棠花—子規と漱石を読む—』 柏書房 1991年
- 6) 海老田輝巳九州女子大学紀要 P108 第36巻 第 3号
- 7) 中国の六朝の梁代に編まれた詞華集。編者は梁の武帝の長子、昭明太子蕭統(しょうとう)。30巻。世界大百科事典 第2版の解説。
- 8) 道徳教育原論 福村出版社 P99
- 9) 道徳教育原論 福村出版社 P115
- 10) 二松学舎100年史
- 11) 二松学舎100年史
- 12) 『漱石全集』第九巻 岩波書店 昭和49年 P7
- 13) 『漱石全集』第十二巻 岩波書店 昭和49年 P7
- 14) 1908年 9月15日『文章世界』
- 15) 『漱石全集』第十六巻P605岩波書店昭和49年
- 16) 『漱石全集』第十六巻P495 岩波書店昭和49年
- 17) 飯田利行『海棠花—子規と漱石—』P46～47 柏書房1991年
- 18) 西晋の孫楚は「石に枕し流れに漱くちすすぐ」と言うべきところを、「石に漱ぎ流れに枕す」と言ってしまい、誤りを指摘されると、「石に漱ぐのは歯を磨くため、流れに枕するのは耳を洗うためだ」と言ってごまかした故事から、漱石を雅号にした。自分の失敗を認めず、屁理屈を並べて、言い逃れをすること。負け惜みの強いこと。「石に漱くちすすぎ流れに枕す」と常用され、「枕流漱石」もいう。
- 19) 1906年、明治39年 6 月、茨城県下館町で発行された雑誌「時運」八号。
- 20) 推敲典故: 賈島は苦吟をもって高く、「李歙の幽居に題す」中の一句で僧は敲くがいいか、僧は推すがよいかと悩みながら歩いているうちに(一説には驢馬に乗っていた、とある)韓愈の行列に突き当たり、賈島が悩みを打ち明けて相談したところ、韓愈は「それはもちろん、僧は敲く、が良い」と言下に答え、それから賈島は韓愈の門下に入ったという話がある。これが「推敲」の故事である。
- 21) 徐前「漢詩人としての漱石と子規への一考察 : 二首の「鴻台」詩を中心に」
- 22) 大正四年『断片』
- 23) 『漱石全集』第一巻 岩波書店 昭和49年 P252
- 24) 1908年9 - 12月、『朝日新聞』/1909年5月、春陽堂)
- 25) 『漱石全集』第九巻 岩波書店 昭和49年P7
- 26) 『漱石全集』第十三巻 岩波書店 昭和49年P839
- 27) 1905年1月 - 1906年8月、『ホトトギス』/1905年10月 - 1907年5月、大倉書店・服部書店
- 28) 漱石全集 第一巻 岩波書店昭和49年P310
- 29) 「累々と徳孤ならずの蜜柑哉」とい俳句がある。(全集(昭和10年)で969-1030の62句は「正岡子規へ送りたる句稿 その二十一 十二月」として収める。1030の句の後に「漱石拝」とある。新聞『日本』(明治30年3月7日)/『新俳句』。)
- 30) 漱石全集 第九巻 岩波書店 昭和49年P7
- 31) 『文学論』序
- 32) 高 継芬 山本孝司 九州看護福祉大学紀要 VoL.13 No.1 P47～48漱石「個人主義」思想の自峙論的要素—アメリカ超越主義からの影響を探る—
- 33) 『日本近代文学の比較文学的研究』 清水弘文堂書房 吉田精一 編集 昭和46年 P6

[Abstract]

The consequence of Soseki's having received from Chinese literature

Ji fen Gao

*Kyushu University of Nursing and Social Welfare , Department of Fundamental Science and
Education Center*

We discuss how Soseki was influenced by Chinese literature, at which he was excellent. His view point is from his work and thought.

Although Soseki made a stay while studying in Britain and was influenced by Western civilization, he always continued to love Chinese literature rather than Japanese or Western literature. He was touched by not only Chinese literature, but also the thought of Chinese literature, i.e., the thought of Confucianism.

Chinese literature places a great emphasis on politics and a sense of ethic and morality. The thought running through Soseki's work is the same as the one in Chinese literature. The thought which has pierced through Soseki's work is the same as Chinese literature thought. He quotes Chinese writings and Chinese poetry in his works. Soseki was a critic of Japanese civilization and society. His many works criticize the civilized society of Meiji and strongly are criticizing war. To criticize Meiji society is his important theme. Soseki also has a civilization criticism house in Japan. It is also a social criticism house.

Chinese literature is the foundation of Soseki's spiritual creation. Furthermore, The reason why the Chinese readers easily feel an affinity with his work is that they can not only see the familiar expression of Chinese poetry and literature in his work, but also notice that his idea is the same as the thought of Confucianism, which runs through the Chinese literature by reading between the lines of his work. It can be said that the Chinese literature is the foundation of Soseki's spiritual creation.

Keywords: *Chinese literature, the thought of Confucianism, Meiji society*